



No.004

能登北部地域医療研究所

春

# のとげんだより

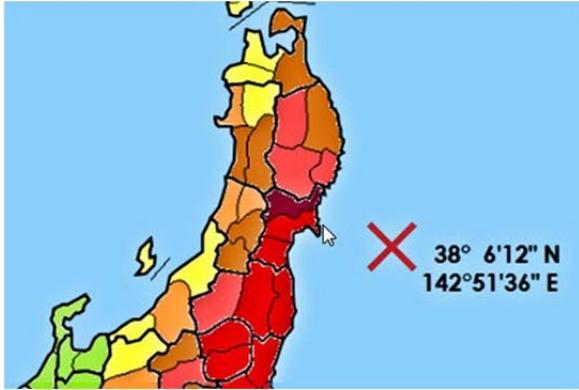
金沢医科大学 総合医療学講座



能登北部地域医療研究所が東日本大震災の医療支援に参画  
—初期臨床研修医も最前線で診療活動にあたる—

能登北部地域医療研究所の中橋教授と2名の初期臨床研修医が、公立穴水総合病院（穴水町）との合同チームを編成し平成23年4月21日（木）、東日本大地震で被災した石巻市に向けて出発した。

石川県の医療支援の一環として公立穴水総合病院チームが被災地に向かうのは二回目となり、今回は、金沢医科大学能登北部地域医療研究所の中橋毅教授をリーダーに、研修医2名（稲垣信吾医師・金沢医大、松宮由利子医師・東大病院）、看護師2名、調整員2名の編成で、石巻赤十字病院を拠点として石巻市雄勝地区の診療活動を行った。



<1日目巡回ルート青線> <2日目巡回ルート赤線>

医療チームは、まず石巻赤十字病院で情報収集、処方箋の受取り、装備の調達をしてから自衛隊によって復旧されたばかりの道路を通過して雄勝地区に入ったが、そこにはただ瓦礫が広がるだけの町があった。さっそく、雄勝地区を統括する保健師さんから各避難所の情報を得て巡回診療を行った。津波で町の全域に被害が及んでいるため避難所はお寺や斎場など、山の中腹に位置する建物ばかりであった。被災後1ヶ月を過ぎても水道・ガス・電気などのインフラが復旧しておらず、暖房は不十分、生活用水などは沢で汲んで登り坂を連日毎日強いられる避難生活であり、ここで対応した疾患は主に、高血圧症、糖尿病などの生活習慣病、感冒症状など感染症、認知症などの高齢者疾患、不眠や疲労感などのストレス関連疾患、深部静脈血栓症（主に予防）などであった。また、腹水の悪化が疑われる肝硬変患者など、専門的検査・治療が必要な患者もみられ、高次医療への紹介が必要な場面もあった。

研修医は、活動中は常に積極的行動し、自ら行うべき作業を見つけ出していた様子であった。避難者の中には受診拒否など自身の健康管理に消極的な方もみられ、疾病の早期治療の困難さを感じられたが、研修医は時間をかけて避難者の方の話を聞きながら関係を築き、適切に診療していたようであった。

1日目は主に雄勝湾の北側のエリアを巡回し、2日目は南側のエリアを巡回した。この地区ではすべての医療機関が津波により壊滅的被害を受けているため、今後も長期的な医療支援活動が必要であると思われた。



避難場所(斎場)



診察・処置をする中橋教授



処方箋を作成する稲垣・松宮医師(両研修医)

## ●被災地で災害医療の実際を現場で学ぶ

研修医2名は、志願して東日本大震災の被災地の宮城県石巻市で、中橋教授のもと診療を行った。

- ・松宮（研修医） 現地はたださえ医療過疎地なのに、病院も患者で飽和状態なので被災地での医療が不十分であることを痛感した。数日しか滞在できなかったのはもどかしかった。
- ・稲垣（研修医） 避難生活は、こちらから見たら過酷でも、被災者は地元を離れたくないのが分かった。その状況は、地域医療でもある意味、一緒だと思った。
- ・中橋（指導医） 研修医にとって被災後の方々に接するのはデリケートでタフな作業だったと思う。しかし、被災地の患者とうまく触れ合い、医師に必要な人間関係を築いてくれた。また、二人の研修医は、今回の貴重な経験から医師としての自覚を大きく深めたものと感じている。

## ●まとめ(研修医ノートより)

- ・急性期疾患や外傷はほとんど見られなくなっており、慢性期疾患に関する受診が多かった。
- ・寝たきりや高度医療を必要とする患者はほとんどおらず、通院可能な被災者が多くみられた。  
⇒巡回診療ではなく、仮設診療所を設置して受診してもらう環境を整備すべき
- ・健常者の中にもストレス関連疾患が隠れている可能性があった。  
⇒検診などで見つけ出す必要があるかもしれない。



研修医にとっては大変貴重な経験となった今回の被災地への医療チーム派遣であるが、これを実現できた背景には多くの方々のご協力といくつかの要因があった。まず、それぞれの研修医の所属する研修センターの理解があったこと、公立六水総合病院の理解と支援があったこと、また医師会も両研修医が医師会員でもあることからトラブル発生時の補償などについてサポートしていただけたことが挙げられ、紙面を借りて感謝を申し上げます。また、被災直後は二次災害の危険や宿泊や食事などの不足から、研修医を含むチームの派遣は困難であ

ったと思われるが、このチームが活動する時期には支援活動環境も整ってきていた。

雄勝地区は3月下旬の状況と比較して、インフラの一部復旧、交通の復旧など、生活環境が徐々に改善されているようであった。また、学校やコミュニティーセンターなどの避難者数もかなり少なくなっており、医療支援のあり方についても再検討する段階にきているようである。



Date 2011.05.24

